

外国人特別研究員が長崎西高校で講演 ～日本学術振興会サイエンス・ダイアログ事業～



講演の様子



講演するタマラ博士

12月21日(木),長崎県立長崎西高等学校において,日本学術振興会の外国人特別研究員で,大学院医歯薬学総合研究科附属原爆後障害医療研究施設の外国人客員研究員であるズヌソバ・タマラ博士が日本学術振興会のサイエンス・ダイアログ事業により,「セミパラチンスク核実験場周辺地域住民における乳がんに関する症例対照研究」と題して,同校の1,2年生約640名を前に講演を行いました。

サイエンス・ダイアログ事業は,日本学術振興会の事業により来日している優秀な外国人若手研究者に,近隣の高校等において研究のレクチャーを行う機会を提供するプログラムで,地域の大学や研究機関で活躍している外国人特別研究員から英語で研究の話を聞くという経験が,生徒たちに大きな刺激を与え,研究への関心,国際理解を深めるだけでなく,外国人特別研究員自身にとっても,地域社会と交流し日本との繋がりを深めることを目的とした事業です。

講演は,タマラ博士が英語で話し,同施設資料収集保存部資料調査室の三根眞理子助教授が日本語で補足説明するという形式で進められました。講演内容は,タマラ博士の母国カザフスタンの紹介,セミパラチンスク核実験場周辺地域住民における乳がん調査の紹介,症例対照研究の紹介でした。カザフスタンは草原,砂漠,湖がある美しい国であり,日本の7倍の広さを持つこと,言語はカザフ語とロシア語であることなどを紹介しました。実験場周辺地域住民の放射線被曝による乳がんのリスクを明らかにするための調査対象は,セミパラチンスクがんセンターに登録されている症例(乳がん患者)85人と対照(乳がんでない人)163人であること,研究は遂行中であり,中間結果では飲酒と乳がんに関連がみられたことを報告しました。また,この研究に用いたデザインは症例対照研究であり,それは症例と対照について種々の要因への曝露歴を調べて比較して,結論を導く手法であることを説明しました。講演後,数名の生徒から,「セミパラチンスク市の現在の放射線量が自然と比べてどのくらい高いのか」などといった質問がありました。

最後に,生徒代表が「講演内容は大変興味深く,乳がんと飲酒の関連についての結果にとくに興味をもちました。」と英語でお礼を述べました。

(医歯薬学総合研究科学術協力課)